

## 「自立」した<14~16世紀>宮古…

仲宗根將二（宮古島市総合博物館協議委員）

### はじめに

1974（昭和49）年4月、請われて新設の旧平良市教育委員会の指導課に入った。前年度に始まった文化財保護行政を軌道にのせ、新たに始まる「平良市史」編さん事業と市民総合文化祭等の文化行政の担当部署である。いずれも役所内各課はもとより、関係諸機関・団体はじめ、市民各層の参画・協力なしではおぼつかない事業ばかりである。

それぞれに担当の委員会が編成され、可能な限り計画段階から市の広報誌はじめ、地元新聞等にも取り上げてもらい周知をはかった。知り得た情報や史資料等は当事者の了承を得つつ、出来るだけ公表して賛同者をふやし、史資料等収集の人脈形成に微力を尽した。軌道に乗るにともなって、市の「広報ひらら」では進行状況とは別に、「文化財をたずねて」「宮古風土記」「石碑をたずねて」「近代宮古を築いた人びと」などのシリーズで、地域性豊かな先人の足跡を紹介したのもその一環である。

そのうち地元紙誌はじめ、時には県内外各紙誌、各機関等からも声がかかるようになった。業務の遂行上、有り難いことであった。宮古に関わる限り非力を省みず、請われるままにほとんどすべてに対応した。主題はすべて先方の指定ではあったが、その意にそいつつも可能な限り、宮古への興味、関心を持ってもらう、あるいは認識を新たにしてもらえるよう心がけた。本稿も『沖縄パシフィックプレス』（月刊）の依頼で、1990（平成2）年9月から、そのつど原稿用紙4~5枚でいど、11回連載したものである。

古琉球ならぬ「古宮古」ともいえる14~16世紀ごろの宮古について、当時知り得た限りの史資料と伝承等にもとづいてのまとめである。全国47都道府県のなかでもっとも小さい方に入る沖縄県、さらにその沖縄全県の十分の一の面積にしか過ぎない宮古だが、なぜか時に宮古が「大陸」に思えるときがある。琉球も、大和も相対化し得る、文字通り東アジアの一角を占めている、「宮古大陸」の観を抱かせるのである。宮古の地域性豊かな風土、歴史、森羅万象…は、そうした魅力を内抱していると思えるのである。

### 1. 言語3年にして通ず~与那覇勢頭中山朝貢600年~

与那覇勢頭豊見親は日ごろから広瀬御嶽の神を信じ、非常に情け深い人であった。宮古は小さな島で何かと不自由なので、何とか大国に誼みを通じたいと願っていた。ある夜、白川浜に壇を築いて香花、供物などをととのえ、2~3丈（約6~9m）もある竹に5色の

糸をつり下げて、その影に座し、神よ大国の方角をさし示したまえと諸星に祈願した。明け方、5色の糸は東北方へなびき、島影を写しだしていた。歓喜した与那覇勢頭は船を仕立て、広瀬御嶽に祈願して沖縄島へ上り、国王に拜謁することができた。- 1705年整備の「御嶽由来記」が伝える宮古と沖縄本島との初の歴史の出会いのくだりである。

1748年校訂の「宮古島記事仕次」はさらにおよそ次のように詳細に記している。

大明洪武年間（1368～98年）、与那覇勢頭豊見親の首長のころ、宮古は民俗悪く、争いが絶えなかった。これを憂えた与那覇勢頭は、宮古は小島故に人の世に上下の分のあることをわきまえないのであり、大国に帰順し、その徳に浴することで解決しようと考えた。そこで白川浜に沙壇を築き、笠頭に5色の緒をたらし、民を救うため大国の方角を知らせたまえと、7昼夜にわたって祈願した。7日目の明け方、明星の下かすかに島影が見え、5色の緒は東北方へなびいた。

大願成就を喜んだ与那覇勢頭はさっそく船出し、神々の加護で順風に乗って、翌日には中山へ到着することができた。しかし言語は通ぜず、ただ手真似身振りで心中の思いを伝えるのみであった。憐んだ王察度は泊に屋敷を与えて住ませたところ、3年にしてようやく通ずるようになった。王は非常に喜び、与那覇勢頭の忠誠を褒賞した。こうして与那覇勢頭は面目をほどこし、宮古へ帰った。以来人びとは王化に服して礼儀を修め、農業に励み、習俗は改まり、太平の世となった。なお宮古と八重山は古くから唇齒の関係にあり、洪武23（1390）年与那覇勢頭は改めて八重山の首長を伴い、中山に朝貢した、云々。

1743～45年編さんの琉球正史「球陽」も、宮古・八重山の入貢で「中山始強」とした上で、同様趣旨のことを記し、さらに八重山のおもと嶽と宮古の平屋地嶽の神は兄弟神であると記している。これよりさき1650年編さんの同じく琉球正史「中山世鑑」は、琉球は大明洪武のころより5年に1回、あるいは3年に1回明国へ往来していたが、その間難風で宮古・八重山へ立ち寄ることが度々あって、両島は琉球国のあることを知るようになり、「慕義向風」来貢し、その後毎年朝貢することに定まった、と記している。さらに1701年完成の「中山世譜」は、「球陽」と同趣旨の「国勢始強」と記している。

これらの彼我の文献に共通しているものは、第1に、宮古と八重山は兄弟同様に近い関係にあったこと、第2に、沖縄本島とは足かけ3年もしなければ言葉も通じないほど、異なった文化圏をなしていたということ、第3に、宮古・八重山が中山支配下に入ること、中山の国勢が強大になったということ等であろう。

戦後考古学など諸学問の成果は、国分直一氏の『南島先史時代の研究』にみられるように、「南島文化圏」のなかでも南部圏とよばれる宮古・八重山の先史時代は、中・北部圏とは異なって、直接縄文・弥生文化の影響を受けず、南方色濃厚な文化を展開していたことを明らかにしている。もとより南方色濃厚な文化という点では、1477年、与那国島で救助され、島伝いに送還された朝鮮・済州島人の見聞談で、大正期以来既に明らかにされてい

る通りである。

与那覇勢頭一行が寓居したという那覇市泊には 1767 年 9 月、一行が船出した白川浜には 1957 年 9 月、それぞれ記念碑が建立されている。今年 1990 年は与那覇勢頭らの中山朝貢から満 600 年ということになる。(『沖縄パシフィックプレス』84 号 1990. 4)

## 2. 「豊見親井」と宮古の「アヤグ」

はじめて中山朝貢の途を開いた与那覇勢頭豊見親の一行は総勢何人であったのか、さだかではない。「白川氏正統系図家譜」の伝えるところでは、はじめ「琉語」に通じなかったために、与那覇勢頭は中山王察度の命によって、「伶俐者 20 名」を泊御殿に住まわせて言語を学ばせたという。それからすると、宮古～沖縄本島間を帆船をあやつって往来するにふさわしい人数は、少なくとも 20 人以上を擁していたということになる。

一行が住居とした那覇泊の地には、乾隆 32 (1767) 年 9 月吉日、白川氏正統 14 世恵政によって、「与那覇勢頭豊見親逗留旧跡」碑が建立されている。それによると泊に留めおかれて 3 年、言語が通じるようになると、与那覇勢頭は泊から王城に至る道中に布を敷き、恭しく貢物を捧げて中山王に拝謁したという。王は盛大な宴を催して一行を歓迎、以来与那覇勢頭（ひいては宮古そのもの）は中山王の臣下として王統のつづく限り貢納を怠らなかった、このとき八重山の支配者もともに拝謁したという。

ところで、与那覇勢頭は泊滞在中、屋敷の一隅に井戸を掘って生活用水に供したが、泉は甘く、かつ清らかで、泊村の人々は「豊見親井」(トゥクミヤガー) とよんだという。康熙年間 (1662～1722) まで存在しており、旧宅の位置する一帯は火立屋の下に当たり、今(つまり建碑のころ)も、「高真佐利屋原」(タカマサリヤバル) とよばれていると記している。泊に留め置かれた 20 名のなかに「高真佐利屋」なる者がいた。滞在中、望郷の念にかられて、毎夜火立屋に登り、はるかに遠い宮古を思って、「阿屋具」<アヤグ>を唱い、あるいは歌を詠じたという。それで泊村の人びとは、この一帯を称して「高真佐利屋原」とよび、今なおその名が残っているというものである。

同時代の記録ではないので、即断はさげねばならないが、一応記述どおりだとするならば、14 世紀末ごろには早くも宮古に「アヤグ」が存在していたことを意味しよう。周知のように今の宮古では歌謡はすべて「アヤグ」あるいは「アヤグ」とよばれている。綾言、つまり美しい言葉の意である。「神のこばを美称する綾言から出発し、綾言が旋律化して謡い物になり、謡う部分を広げていった」という、理解にたっている。外間守善氏らは 1964 年以来 10 数年にわたる現地調査、研究をふまえ、つぎのように変遷の課程に依拠して、3 つに分類されている。

(1) 呪禱的歌謡 人と神をつなぐ役目を果たすニガリ、マジナイゴト、タービ、ピーシー、フサ、ニーリ、アヤグ、トゥクルフン、など。

(2) 叙事的歌謡 人びとのくらしや世の中の事象を対象化した長アーク、クイチャーアーク、など。

(3) 抒情的歌謡 旋律化をいっそう強め、人の心の抒情を包みこんだトーガニアーク、シュンカニなどへと、変遷していったであろう、という認識である。

人と神をつなぐ呪禱的段階から早くも「アーク」が誕生していたことを示している。与那覇勢頭の沖縄本島船出に至る白川浜や広瀬御嶽での祈願にさいしても「アーク」は登場していたのかもしれない。いまも法事にさいして僧侶の読経と同時に法事(?)に招かれ、祈るカムカカリヤの願いごとは、聞く者をして陶酔境にさそう美事な旋律をもっている。

「道的美さや 仮屋の前、あやぐの美らさや 宮古のあやぐ、イラヨーマーン 宮古のあやぐ、ヤイヤラ スウリ」とうたう「アヤグ節」にみられるように、宮古の「アーク」は自他ともに琉球一を誇ったこともあったのであろう。

なお泊の「逗留」碑は、白川氏正統 12 世恵治がその子恵通に建立を命じたが、恵通は眼病にかかって果たせず、第 5 子恵若によってようやく建立できた。裏面中央に「正統恵政謹建立」とあるのは、恵通の嫡子恵政が正統 14 世として父祖以来の宗家の課題を恵若をして果たせたということであろう。(注・筆者はかつて「家譜」に該当する名の記載がないところから、恵政は「恵治の誤りと思われる」と記したことがある。その後、平良栄賢氏が位牌を照合した結果、「家譜」記載「14 世恵當」こそ恵政その人であることを確認していることを記して、訂正しておきたい)。(85 号 1990.6~7)

### 3. 黒潮に閉ざされた「言語」圏

日本語は大きく本土方言と琉球方言の 2 つに分けられるというのは言語学界ではほぼ定説のようである。琉球方言の範囲は、北は奄美から南は八重山の与那国まで、のちの琉球王朝の版図にほぼ重なり、本土方言は奄美に近接するトカラ列島以北である。両者はその祖を 1 つにするといいいながら、まるで外国語のように互いに意思を通わすことは不可能とわいていいほどに、大きなへだたりをもっている。

このような大きなへだたりは何に起因するのであろうか。小島瓊禮教授は「琉球諸島の隔絶性を、もっとも合理的に説明してくれるのは、黒潮である」と「黒潮による交通の障害」をあげている。フィリピン東方に起こった黒潮の本流は、与那国島の西を北上し、東シナ海を、大陸棚に沿って東北に進み、奄美大島の北を東へ抜けている。つまり琉球諸島は南も北もすっぽりと黒潮によって切りとられた形になっているのである。しかもその間に介在する奄美～八重山の島々の間にはいちじるしい海流は認められず、航行の障害はすくなかったとしている。

それではいつごろ日本祖語ともいべき言語が生まれ、さらに大きく本土方言と琉球方言に分かれたのか、そのどちらもまだ定かではないようである。

日本語誕生の可能性について、上村幸雄教授は、①弥生以前か、②鉄と稲をもち、わずか100年そこらで九州から東海地方まで広がった弥生時代なのか、③それ以後の日本列島以外からの影響、たとえば4世紀の騎馬民族の侵略説など、以上3点をあげつつも、なお「3つとも日本語の祖語の決め手(で)はない」といつている。

さらに「琉球列島についてもまだ定説はない」とした上で、「弥生文化が、列島の北半分にいくらかの影響を与えている点をはっきりしている。この時、方言の祖語が来たのか。ずっと後の遣唐使の時代、すなわち朝鮮半島が新羅の勢力が強く安全でなかったため、近畿の権力が琉球列島に関心を寄せた時代なのか。または、遣唐使の廃止後、九州との関係ができたのか。残念ながら決定的データは集められていない」としている。

上村教授はさらに仲宗根政善教授の研究成果をもとに、琉球方言は奄美・沖縄グループと宮古・八重山・与那国をひとくくりとする先島グループの2つに分けられるとしている。柴田武教授はかつて九学会連合で沖縄調査に参加された際の感想で、「宮古国の宮古語」といわれたことがある。宮古、八重山、沖縄三諸島のことばの一つひとつの単語を比較すると、「正三角形のそれぞれの頂点に立つような遠近関係」にあつて、「沖縄と宮古の違いは、沖縄と八重山との違いに等しく、また、宮古と八重山との違いにも等しい」ともいつている。三者同じほどに通じあえない関係にあるということであろうか。

1390年、与那覇勢頭豊見親がはじめて中山(沖縄本島)に渡つたとき、「言語3年にして通ず」というほどなのだから、当時から彼我の言語は直ぐには通じないほどへだたつていたということであろう。もっともこの点については別の見方もある。今より数百年も前のこと、同じ琉球方言ならば沖縄と宮古の方言の差は、今よりはむしろすくなかつたろう、習得するのに2、3年もかかるということは当時の宮古の言葉は琉球方言化していなかつた、つまりは別の言語であり、そののち言語転換をおこした、との見方もあるようだ。

黒潮という自然的現象によってへだてられた「本土」と「琉球」(もしくは「沖縄」と「宮古」)が、その後の政治的・行政的あるいは社会的隔絶性によって、そのへだたりを大きくしたのち、さらに一定の時間をおいて改めて交渉をもつようになったとき、そのへだたりはいっそう大きなものになつていよう。

さきの柴田教授は、琉球方言内の地域的な違いについて、原因は「天候でもなく、人種でもなく、性格でもなく、一に、交通のせいなのだと思ふ。離島という地理的条件が交通をはばんだために、それぞれの土地で思い思いに日本語を発展、変化させたのであろう」と記している。

(注)本稿に引用した「論考」はすべて1970代から80年代初期にかけて発表されたものばかりである。現在はさらに深化し、あるいは異なつた方向へ展開している論もあるかもしれない。(86号、1990.8)

#### 4. 「豊見親時代」から琉球王権へ

与那覇勢頭の中山（沖縄本島の王権）入貢について、『宮古史伝』（1927年）の著者・慶世村恒任は、「宮古全島の中山服属と見ることは出来ない。与那覇一族の中山附庸と見るのが妥当」であろうとの見解を示している。

つまり中山入貢後毎年朝貢したであろうが、「一定の数量」というものではなく、あくまで「儀礼的」なものであった。与那覇勢頭の属した与那覇原一党は、平良の決戦で目黒盛側に敗れさっており、宮古の統治権は当然目黒盛側にある。戦乱の世をしずめた目黒盛は諸制度をととのえて農耕を奨励し、嶽々を整備して報本・敬神の思想を涵養して、「長幼の序」をととのえたという。言いかえれば目黒盛一族による「島の主長」職は実際にもとづき、また与那覇一族の「島の主長」職は中山の命によるものであり、このころ宮古には「自ら権勢上の二分派が出来た」わけだが、それは表面にあらわれるほど確然としたものではなく、人びとは「目黒盛の制度を遵奉しつつ、一方では与那覇勢頭に帰趨する者もあった」という認識にもとづくものである。

今日風に言えば宮古を代表する二大勢力が「平和共存」していたということであろう。

これに対して『宮古島庶民史』（1957年）の著者・稲村賢敷は、当時の宮古には「日本本土並びに沖縄諸島から「多数の渡来人がはいるり込んで社会的大変動の原因をなして」おり、「諸按司の勢力抗争のために弱肉強食の修羅場を現出」していた、ととらえている。こうした宮古をとりまく「南西諸島間の海上は日本、琉球、明国等の諸船舶幅奏して殷賑なる貿易場となりつつあり、那覇を中心に「交通貿易が活発に行われていた」ので、「宮古だけが全然別個の世界に住み耳目を塞がれて居ったと考える事は出来ない」とし、むしろこうした南西諸島間の状況は「宮古にも波及して人心に大影響を与えつつあった」のだと、説明している。

このように与那覇勢頭の中山入貢の必然性を内外情勢から説きおこした上で、与那覇勢頭の後裔・『白川氏正統系図家譜』の「本島麻姑山（宮古）は遙に中山を離れ、極めて小さな島で、海外にあり、民俗常に暴戾に馳せ強は弱を凌ぎ弱は強に諂いて仁義忠孝の道を知らず - 豊見親はこの俗習を革めんために、大国たる中山に通じて平和を致さんとす」を紹介している。他の南西諸島の島々の中山入貢が「主として交易上の利を得たいという経済上の理由に存した」のに、与那覇勢頭つまり宮古は「大国に通じ其の統治を受ける事に依って、島内の秩序を維持し平和を致す事にあつた」という認識でもある。こうした「平和思想」は、与那覇勢頭の前半生 - 与那覇原戦争による殺りくという深刻な体験から生まれたものだ、というのである。

ところで資源の乏しい宮古から中山へ何を持っていったのか定かではないが、持ちこまれた品々は、遺跡の出土物から大方は理解できる。宮古の遺跡は浦底・長間底の先史遺跡を別にすると、すべて13世紀以降に発生している。しかもこのころ狩猟・漁労の時代から農耕社会に移っていることもほぼ明らかである。米・麦等の穀類のほか、青磁、白磁、

褐釉陶器、鉄製品等の外来品が多量に出土しており、これらはすべて宮古の外から持ちこまれたものである。各地に残る渡来人や鍛冶神の伝承、神歌など、宮古の外と大きな交渉をもっていたことを裏書きするものは多い。

八重山の「慶来慶田城由来記」は宮古が沖縄本島の王権に服属しない以前から、宮古の豊見親は八重山に影響力をもっていたことを記している。多くの百姓を動員して用材を伐りだしていたことも記されている。時代は下るが 1477 年与那国で救助され、島伝いに送り返された 3 人の朝鮮・済州島人は、宮古島の人びとが沖縄本島と貿易して鉄製釜を入手していること、樹木の少ない多良間が西表や伊良部から材木を入手していること等をも見聞している。

目黒盛に与那覇勢頭という、宮古を統一した、あるいは多くの文物導入の端緒を開いた偉大な統率者に対して、宮古の人びとは「豊見親（トゥユミヤ）」の尊称をたてまつった。響動む人、偉大な支配者の意である。以来およそ 2 世紀、宮古は外部からの干渉をうけることのない、宮古独自の世界、慶世村恒任のいう「豊見親の代」 - 豊見親時代をむかえたのである。

この二大勢力が合一していくのは与那覇勢頭の孫大立大殿に代って、目黒盛の玄孫仲宗根豊見親が登場するときである。それは尚真の琉球王朝確立期であり、宮古もしっかりと琉球王権にくみこまれる時期を同じくするものである。(87号、1990.11)

## 5. 「ウプュー(豊饒)」をもたらした人びと

宮古の遺跡はすべてとっていいほど、島の外とのかかわりあいのなかで成立してきたらしいことは、すでに見たとおりである。それではこのころ、つまり 13~15 世期ごろ、宮古から持っていったもの、今風にいえば移輸出したものは一体何であったろうか。記録は何一つない。宮古をとりまく諸地域 - 八重山や沖縄本島、あるいは日本本土、中国大陸にしても、これが宮古から持ちこまれたものだ、と明確に教えてくれるものはない。

周知のように近世期ならば貢租として上納した代表的な品目は、粟と宮古上布等ということになる。近代に入ってからには黒砂糖、粟・麦等の穀類、牛馬、高瀬貝等の海産物である。もう少し下って宮古経済が一定の安定期らしい時期を画すころには、黒砂糖、宮古上布、カツオ節が三大特産品といわれた。

これらはあくまで近世以降のことである。少なくとも古琉球といわれたころ、さしづめ「古宮古」とでもよべる 13~15 世期ごろの宮古の産物とは何であったろうか。柳田國男が晩年の著書『海上の道』で、宮古近海で無尽蔵とみなした寶貝(子安貝)なのであろうか。それとももつと下って「球陽」等にもみられる、琉球から中国や朝鮮に貢したとされる馬、硫黄、胡椒、蘇木、乳香、甲等の品々のなかに宮古とかかわるものがあるものであろうか。特定できそうなのはせいぜい馬であろうが、定かではない。

そこでさまざまな仮説が展開されてくる。なかでももっとも支配的なのは矢張り馬である。宮古馬は日本の在来馬のなかで島しょ型の小馬として戦前最盛期には1万頭近く数え、広く知られていた。おとなしくて粗食に耐え、そのくせ力持ち、と三拍子そろっていて農耕用としてはもとより、幼少年の乗馬用としてもよろこばれていたという。現天皇が皇太子のころ宮内庁は3頭買いあげたほどである。

しかし時は古琉球期である。隆起サンゴ礁の表土浅く、台風と干ばつがひっきりなしに襲来する島では大木は育ちにくい。馬のような大型の生きものを大量に宮古の外へ運び出す船を造る用材はあったのであろうか。疑問とせざるを得ない。小舟で八重山へ渡り、大船を建造して持ち返るといった方法もあるが、ほかにもっと可能性の高いものはないだろうか。

そこでさほど大船でなくとも、また途中で餌をやる必要もなく、逃げたり、やせおとろえて死んだりしないもの、つまり人手を必要とせず価値高いものとして、胡椒を強調する向きもでてくる。これなら宮古中至るところに自生し、誰にでも手軽に収穫でき、乾燥も天日で可能である。カメに入れば運搬も簡単だ。カメは宮古産の土器（ンタガミ）でなくとも外から南蛮ガメ（スビガメ）が大量に入っているのではないかと、というのが…。

馬に至っては宮古では一般に太古の昔から飼育されていたように考えがちである。しかし、1477～78年、与那国島で救助され、島伝いに朝鮮へ送り返された3人の朝鮮・済州島人は、牛や山羊はもとより犬、猫、鶏まで見ていながら、馬や豚がいたとは言っていない。ひょっとすると「古宮古」時代、宮古には馬はいなかったかもしれないのである。さすれば矢張り宮古からの積み出しは胡椒であろうか。それともほかにこれに値する高価だが手軽に運べる何かがあったのであろうか。

あれこれ論じていくなかで、さらに導き出されてくるのは、13世紀以降の宮古の人びとはおそらくすべて、宮古外から渡来した人びとであろうということである。遺跡で見られる遺物は人とともに外から入ってきたものであり、見返り品として宮古から改めて持ち出す必要はなかったのではないかと、という見方である。関連して中継基地としての役割も浮上してこよう。

櫂のみで大海を乗り切るのは困難であり、季節風と潮流を利しての航海が主であったころである。港は風待ちの港でもあり、その間乗組員や乗船者の食料や飲料・燃料の補給、休養の場でもあったのではないかと。各遺跡の宮古外からもたらされた遺物は、その生活用品、あるいは見返り品とみることはできないだろうか。

宮国、新里、砂川、友利など城辺四箇に伝わる「ンナフカ」まつりに象徴される「大世積綾船」の伝承は、こうした宮古の外の、あるいは宮古にかかわる後続部隊が宮古にもたらした、いわゆる「ウブユ（豊饒）」ではなかったろうか。しかしいちがいに行きずりのかかわりあいではなく、そのまま定着していく要因をもつ人びとでもあったのではなかろうか。



こうしてみると、我が宮古人の祖も単一どころか、さまざまな系譜が浮かびあがってきて、思いはふくらむばかりである。(88号. 1990.12)

## 6. 与那覇勢頭の出自めぐる諸説

宮古と琉球(沖縄本島)王権との初めての出会いー公的交渉を実現した与那覇勢頭豊見親とは、どのような人物であったろうか。同時代の記録は何ら具体的には語っていない。1705～07年6月、在地役人が整備して三間切の頭・在番役人らの決裁をへて首里王府に報告した「御嶽由来記」の控は、廣瀬御嶽の条で与那覇勢頭について「恵深きもの」と記している。さらに1754年整備の「白川氏正統系図家譜」は、その序で「生質純明才智超人」と記している。性格は純粹にして明朗、才智は非凡であるということであろうか。ついで「家譜」のくぐりには「童名真佐久、生卒不伝或曰天人之子也然世遠而未詳其实否、父母不詳、室久栄免嘉」とある。子どものころの名は真佐久(まさる=人にすぐれる)といい、生没年月日は伝わっていない、天人の子ともいわれている、しかし余りにも昔のことなので真偽のほどは未だ明らかでない、父母についてもわかっていない、妻はクエメガという、といった意である。

1500(弘治13)年2月、八重山のオヤケアカハチらの事件平定にさいして、首里王府軍3,000人の先導をつとめた仲宗根豊見親の後裔・忠導氏おやけ屋の大主のまとめた宮古の古事を1748(乾隆13)年5月、在番筆者明有文長良が校訂、「宮古島記事仕次」と名づけた古文書がある。漲水御嶽にまつわる宮古島創世神話から説き起こして、仲宗根豊見親の嫡男・仲屋金盛の娘マボナリの悲業の死を遂げるまでの歴史を口碑等にもとづいてまとめたものである。25条からなり、そのなかに与那覇勢頭にかかわるとみなされる条が2つある。「目黒盛豊見親与那覇ばらと軍(いうさ)の事」と「与那覇勢頭豊見親初而中山朝見の事」の2条である。前条には「平良より東に与那覇ばらとて一間切あり、その主は佐多大人という者なり、この郡に兵十行(つら)あり、一行とは100人をいう」と記し、宮古中を攻略しようとしたが、最後は目黒盛側と漲水の浜で決戦となり、敗れ去ったとあり、必ずしも与那覇勢頭を思わせる人物が登場するわけではない。後の条は既にみてきたように「家譜」等にも記された中山朝貢の経緯を紹介する内容である。

この2つの条は与那覇ばらと与那覇勢頭を結びつける何ものも語ってはいないが、慶世村恒任は、真佐久は与那覇原の「一少年」で、白川浜近く現在の与那浜に逃れ、長じて中山朝貢の道を開き、与那覇勢頭豊見親と尊称された、と『宮古史伝』に記している。しかしそれを裏付ける史料は示していない。稲村賢敷は多良間島に伝わる古謡「与那覇勢頭豊見親のに一り」をもとに、与那覇勢頭は現在の平良市東仲宗根の盛加井附近で生まれ、20歳のころ与那覇原の若き「一武将」として目黒盛との戦いに参加、瀕死の重傷を負った。生死の境をさまよったのちようやく蘇生、長じて一族の頭となって白川浜から船出して中

山に朝貢、宮古を立派に建て直したと理解することで、佐多大人亡きあと与那覇原一族を束ねるほどの地位につけるものは叔父甥というよりは親子関係、息子であろうと『宮古島庶民史』で位置づけている。

このように「家譜」はもとより、旧記類も古謡等も佐多大人と与那覇勢頭との関係ばかりか、与那覇勢頭そのものの出自について何らふれていない。そのためにいわば状況証拠だけで類推、慶世村はたんに与那覇原の「一少年」、稲村は「親子」関係を想定しているのである。当然他にもいろいろな見解が生じて不思議はない。小説や詩を得意とした本村武史は長編「てんま船異聞」のなかで、佐多大人の娘婿、松下仁は『平良市史』第1巻で「ニイリ」等を論拠に、稲村同様親子説をとっている。

こうした見解とはまったく異なった観点から、近年新たに2つの新しい説が登場している。1つは砂川明芳氏が『宮古島郷土史考』で展開している。琉球王権と朝鮮との交渉の経緯に、下地に伝わる口碑をからめ、与那覇勢頭の出自は倭寇被掠朝鮮人と来間島の豪族の娘との間にできた子であろうと考察、さらに「白川氏正統系図家譜」序に遺老説として、宮古の首長を「与那覇勢頭、糸数大按司、根間氏豊見親(注・目黒盛)」の順で記してあるのに着目、目黒盛は与那覇勢頭より後代で、与那覇勢頭の死後、宮古は争乱の世となり、目黒盛によって平定された、との見解を示している。いま1つは、平良恵貴氏が、慶世村、稲村両先学の説を整理し、現地踏査の上で、与那覇勢頭豊見親は与那覇原側どころか、むしろ敵対者とみなされている目黒盛側の代官であり、その後継者になった人物であろう、と提起している。(89号 1991. 1~2)

## 7. 「伯牛の病」で隠懐した泰川大殿<sup>ウプトゥス</sup>

与那覇勢頭豊見親について、3世紀余も後代の子孫によって整備された「白川氏正統系図家譜」は、「生卒不伝」「父母不詳」としながらも、「或曰天人之子也」と記している。というのはすでに見てきたとおりである。余りにも古い時代のことなので、生卒はもとより父母が何処の何人であるか不明としつつも、天人の子ともいわれていると明記したのは、絶海の孤島にあって中山朝貢という、いわば前人未踏の大業をなしとげたからの評価であろう。

童名「真佐久」(マサリ=人に勝れる)が、「豊見親」(トゥユミヤ=響動む人)と尊称された、ということが、評価の裏付けともなっていよう。

それほど名高い統率者である与那覇勢頭豊見親の2代目、つまり後継者について「家譜」は、子ではなく孫がついだと記している。子は泰川大殿、孫は大立(里)大殿である。

泰川大殿について「家譜」は、「大殿得病隠泰川」と記している。大殿は病気のために泰川なるところに隠居したというのである。「家譜」にはこれっきりしか記されていないが、「宮古島記事仕次」は「大立大殿は昔、初めて中山朝貢の道を開いた与那覇勢頭豊見

親の一子泰川大殿と、聞こえし人の子なりけり」と書き起こしている。聞こえし人というからには泰川大殿も相応に著名なる人物であったというのであろう。さらに「有徳の人であったが、壮年のころ、思いがけず伯牛の病にかかり、泰川原に莊園を構えて隠居し、長命を保った」とつづけている。泰川原に隠居したので、泰川大殿と称されたのであろう。

「記事仕次」はさらに要旨つぎのようにつづけている。「或る夜の夢に、我が家の屋上に福木がはえて、またたくまに高さ数百丈(約 1500~1800m)にまでなった。そこで占って見たところ、善子をさずかる瑞夢とでたので、さっそく夫人を招いて夫婦のまじわりをしたところ、果たせるかな、その子は成人したのちは宮古の首長となり、大立大殿とあがめられ、子孫繁昌きわまりなし、云々」と。

初代は「天人の子で、初めて中山朝貢の道を開いた豊見親」、2代目は年若く元気盛んなころ病気で隠居したとはいえ、「音に聞こえた、有徳の人」、3代目はこれら前2代の血を受けついで「宮古の首長としてあがめられ、子孫繁昌限りなし」と、よいことづくめに飾りたてられている。

ここで「伯牛の病」についてふれておきたい。孔子の弟子の伯牛が病気にかかり、世間を恥じて一室に蟄居していた。最後が近づき孔子は人の止めるのも聞かず、窓から手をさしのべて別れの握手をした。部屋に入らなかったのは伯牛が恥じるからである。後の世になって、孔子の見舞いの状況から、「伯牛の病」はハンセン病だという人、いやこの場合病名は問題ではなく、高貴の人の重い病気のことである、との両説が伝えられている。ここで肝心なことはハンセン病か、高貴の人のかかる重い病気のことか、ということも確かに大事だが、何よりもキメ手となるのは、「宮古島記事仕次」を書いた友利の大主、ひいてはそれを校訂したという、明有文長良が、どちらの観点に立っていたかということにあるのは、いうまでもないことである。

ともあれ一般に伯牛の病とはハンセン病であろう、という見方が強いようである。戦後、ハンセン病療養所・宮古南静園の園長をされた医師の新城恵清は、白川氏の後裔であり、ハンセン病を患った泰川大殿の子孫として、ハンセン病療養所に勤めるのも何かの因縁であろうと言っておられたことがある。

また白川氏正統 21 世の裔故泰川恵徹医師は、元々与那覇姓を名乗っていたが、長じて自ら「泰川」に改姓した。世間では今どき何を好んでヤマト風に改名する必要があるだろう、いわんや与那覇勢頭豊見親直系の当主ともあろう人が、という声も聞かれたようである。しかしすでに見てきたように、あえてヤマト風に改姓したのではなく、明らかに祖先返りにもとづく改姓であることがわかる。事実上の第 2 世泰川大殿にあやかっている。あるいは医師であるとともに、公衆衛生の専門家として新城医師の思いに通ずる何かがあるに違いないであろうか。

ところで泰川大殿が隠棲したという泰川原について、平良市イリ里の人々は古くからパイナガマとトゥリバーのほぼ中間にあるピキヤツ附近だと言い伝えている。旧記類に「通

尻という磯辺」と記されているのが、所謂ピキヤツであろうといわれている。文字どおり尻抜けであり、下地島の通り池のように底で海に通じている。附近にはかつてウリガーであったらしい井戸があり、原名から「アマビザガー」と呼ばれている。「タイガー」と呼ぶ人もいたという。(90号、1991. 4～5)

## 8. 日本人渡来のルート：海流と季節風

名も知らぬ遠き島より 流れよる椰子の実ひとつ ふるさとの岸を離れて 汝はそも波に幾月……。明治のロマンにあふれる、周知の新体詩人・島崎藤村の詩である。昭和に入って、作曲家・大中寅二によって曲がつけられ、多感な若者たちの愛唱歌として一世を風靡した。藤村にこの詩を手がけさせた要因が、日本民俗学の創始者・柳田国男にあることは意外と知られていなかったようである。

明治31(1898)年夏、東京大学在学中の23歳の柳田は、愛知県伊良湖岬でおよそ50日間を過ごした。その太平洋に面した海辺、恋路ヶ浜ではるか遠い南の島より黒潮にのって、ただよい流れ着いたであろう椰子の実をみつけた。その体験を帰京後、友人の藤村に語ったことによって、「椰子の実」の詩がうまれた。

ところで柳田に伊良湖岬を紹介したのは、伊良湖岬所在の渥美町出身で挿絵画家の宮川春汀であったという。春汀は、柳田とは和歌の同門の友人である田山花袋の友人なのである。万葉集にたびたびでてくる伊良湖の名が、友人のそのまた友人の故郷であったところから、和歌に通じた柳田の旅心をそそったのであらうと伝えられている。柳田と藤村、花袋、春汀……と並べていくと、改めて人と人との出会いの不思議、すばらしさを思わざるを得ない。

浜辺に漂着した「椰子の実」について藤村に語った柳田自身は、それから数十年の長きにわたって、物と同様に人も海流と季節風によって移動したであらうことをあためつづけてきた。全国各地を直接歩いての調査、徹底した資料と情報の収集、整理、それらの比較考証を積み重ねて醸成、遂にロマンにみちた日本人の渡来ルートを示す壮大な仮説『海上の道』一卷を刊行した。1961年7月、86歳の時である。

大小無数の島々からなる日本列島は本州、九州といえども、アジア大陸からみれば島である。北海道から沖縄県までおよそ3千数百キロメートル、東北から南西へ弧状につらなる島々には、人も物と同様に海流と季節風を利用して渡ってきたのであらう。もとより人は椰子の実のような物と違って、海上を際限もなく漂っているわけにはいかない。また、無事どこかの島にたどりついたとしても、生きていくのに必要な食物が得られるとも限らないのである。

さいわいにして万に一つの幸運に恵まれて命ながらえることができ、その島が住むに値するとわかったとき、ひいては以前の土地よりも魅力ある土地と知ったとき、人は再び引

き返して妻子、友人、同胞を伴ってくることになる。大陸から日本列島に漂着した、その最初の島がわが宮古であろうというのが、『海上の道』に示された柳田の仮説である。

再び命がけで引き返せるほどの魅力は一体何だったのか。八重干瀬など宮古近海の干瀬で無尽蔵に散乱する宝貝であったと、いとも簡単に提示する。秦の始皇帝が通貨を作る以前、大陸では宝貝はまさに「至宝」であった。宝貝を採集し輸送を生業としていたが、いつか銅貨が登場して宝貝の需要がそれほど必要とされなくなったとき、はじめから稲を携行していた人びとは稲作の適地を求めて、島伝いに北上していった、というものである。

ことし1991年は、柳田國男がはじめて九州東岸を振りだしに、奄美・沖縄を訪ずれた所謂『海南小記』の旅から70年、『海上の道』を刊行して30年という節目の年である。その意義ある年に、「第5回柳田國男ゆかりサミット」が、平良市で開かれた。北は岩手県遠野市から、南は平良市まで、全国九つの自治体代表、研究者およそ400名が一堂に会して、柳田の「経世済民」世を治め人々の苦しみを救済する一の精神を、現代の生活レベルで学び継承し、相互の教育、文化、産業などの振興を図って地域を活性する一討議が行われた。

谷川健一日本地名研究所長の記念講演「柳田國男と沖縄」につづいて、谷川講師を司会に、シンポジウム「海上の道をめぐって」も展開された。渡部忠世(稲作)、国分直一(考古)、大林太良(神話)、奥谷喬司(宝貝)ら4氏はいずれもその分野では国際的に著名な学者である。渡部教授は、「日本列島を半円状にとりかこむ全ての地域から稲は渡来してきた」と考えてよく、ジャポニカ、インディカ以外にインドネシア辺りからジャバニカが北上している、国分教授は稲作はともかく「粟と熱帯系のイモは呉越世界の南域から八重山地方を通しての導入」が考えられる、大林教授は、北部琉球、南部琉球に大別できるとした上で、日本本土、中国東南部、東南アジアなど各地につらなる神話、奥谷教授は、宝貝は「人類の発達史にも関わってきた数少ない貝類のひとつ」などと述べた。海流と季節風—いまでも豊かなロマンをのせて流れている。(91号、1991.6~7)

## 9. 「豊見親!」と尊称される：大立(里)から仲宗根へ

「白川氏正統系図家譜」によれば与那覇勢頭豊見親を元祖とする白川氏2世は大立(里)大殿である。すでに見てきたように大立大殿は、豊見親の子ではなく孫である。本来第2世を名乗るはずの子は泰川大殿であるが、泰川大殿は「伯牛の病」のために泰川原に隠棲、その子の太立大殿が家督をついだものである。また、大立大殿は泰川大殿の長男ではなく、二人の兄がいたが共に早逝したことから、三男が家督をついで第2世を名乗ったというものである。

白川氏第2世として家督をついだ大立大殿は、天順年間(1457~64年)、首里王府から宮古首長に任命され、年貢をもって中山に上った。以後しばしば年貢をもって上国したが、

何しろ古いことなので詳しいことはわからないと記している。さらに成化年間（1465～87年）、年貢をもって上国したさい、もはや70余歳にもなり職務を遂行するのも難しいので首長職は辞任したい、代って今後は息子の能知伝盛恵照と側近の忠導氏空廣とを交互に上国させたいと願いで、許可を得て帰った。その後、恵照は同じく成化年間中に父に代って上国したが、帰途逆風にあって久米島に漂着、そこで病没した。「白川氏正統系図家譜」の宮古首長にかかる記述はそこまで、あとは4世恵山が仲宗根豊見親（空廣）の娘真保那利を妻に娶ったこと、下里与人になったことを記している程度である。

他方「忠導氏正統系図家譜」は、元祖仲宗根豊見親が成化年間、首里王府から宮古首長に任命されたと言い伝えている、と記している。ついで弘治年間（1488～1505年）、宮古は民俗悪く、人は争いを好んで人命を害する有様なので、豊見親は熟慮の末、これは土地が肥えて米粟の生産が豊かなために、人びとは自然と放恣になっているのであり、首里王府への年貢を定めて勤勞を知らせていけば自然と仁人になると、王府の許可を得て村々に役人を配置し、毎年税を徴収するようにしたところ、民俗も改まって人びとは農業に励み、礼儀を修めて太平の民となった、と記し、さらにそのとき「蔵許」（元）一軒造営して仕上世蔵、船手蔵を設けたと追記している。大立大殿から仲宗根豊見親への、所謂政権移譲について、慶世村恒任は『宮古史伝』で、「大殿は晩年、加和良大親と玄雅（仲宗根豊見親）とに政を執らしめたが、74歳のとき島主職を子能知伝盛恵照に行わせ、玄雅を執権とした、しかし恵照が久米島で病没したため、実権は仲宗根玄雅に帰した」と記している。大立大殿と長じて仲宗根豊見親と尊称された空廣との出会いについて、「宮古島記事仕次」はつぎのように伝えている。

ある日、大立大殿は赤牛にまたがり、大勢の家来をつれて通尻（俗称ピキヤズ）という磯へ白縄の慰みにでかけた。途中ツヤコミヤという荘園の近くを通ると幼童がニンニクを束ねて差しだし「我がつくりし物の初を奉まつらん」という。その姿非凡にして言語さわやか、大人の風あるをみてとった大殿は「お前は誰の子か」と問う。「根間の大親の養子空廣です」「ならば真誉の子の息子か。誰がニンニクを献ずるよう教えたか」「母の命で荘園に出かけたところ、主のお通りにお会いした。誰れに教わったわけでもありません」「何歳になるか」「7歳です」、空廣の利発さに大喜びした大立大殿は、空廣をも伴って白縄の慰みにでかけた。この日は大漁で、大殿は空廣の才知をためそうと、獲物の配分を一任した。空廣は相当な量であったにもかかわらず、短時間で過不足なく配分し終えた。大殿は大いに感じるとともに帰途にのぞんで、空廣に数百尾の魚を与えた。空廣は大殿に礼を述べると、従者全員に二尾ずつ与え、うち一尾は我が家に届けるよう指示した。大殿はいよいよ空廣の非凡の才知に感激、手許に引きとって養育することにした。

17歳になった空廣は大殿の執権となり、万事慈悲の心をもって諸人に接した。そのころ貢租は諸味麴で納めており、大殿の屋敷には諸方から運ばれていた。員数の多いときは収納順番を待って門外で一夜を明かすこともある。時には二泊に及ぶこともある。また時

には器に残りがあるときはこぼしたりするので、附近は諸味麴が山のようにうず高くなり、あるいは川のようになったりする。空廣が執権になってからは収納は迅速になり、夜を明かすこともなくなった。また残り分もこぼさず、かえって遠方よりの御苦勞をめでての大殿からの賜わりものだといって、分け与えた。

万事このように慈悲心をもって諸人に接したので、人々は空廣を慈父のように慕い、大殿死後、子が幼くて政がとれないところから、諸人はこぞって空廣を尊んで「仲宗根豊見親」と称して、島の主にした。豊見親はいつそう諸人を子の如く愛したので、諸人もまた豊見親を父母の如く慕い、その徳風にしがいなびいたという。

豊見親とは偉大な統率者よ、の意である。(94号、1992 1~2)

## 10. 尚王権と宮古・八重山の対応

大立大殿の後をついで宮古首長となった仲宗根豊見親は、1500年、八重山の「オヤケアカハチらの事件」にさいし、一族郎党：宮古各地の豪族を率いて従軍した。首里王府軍の先導役をつとめたのである。その功によって仲宗根豊見親は、王尚真より宮古の「頭職」を賜ったと「球陽」等の史書は伝えている。そのさい妻宇津免嘉は大安母に任命されている。王を守護する首里王府における最高の神職聞得大君の下、宮古の神職の最高位である。首里王府の権威を背景に、仲宗根豊見親は政治上の、また妻は人びとの心の領域、信仰の世界における最高位についたことになる。いわば祭政両面から宮古における支配者としての地位をゆるぎないものにしたといえよう。

そればかりではない。二男真列金（祭金）、ついで三男知利真良は八重山の頭職に任命されており、仲宗根一族は宮古のみならず、八重山への影響力をも大きく強めたことになる。宮古は八つの島すべて隆起サンゴ礁の島で、高い山も地表を流れる川もない。表土は浅く大木は育ちにくい。その点、山あり川あり、古生層の肥沃な土地をもつ八重山は、自然の変化に富み資源豊富である。何よりも建築用材はもとより造船用材が豊富である。宮古からみれば比較にならぬほど魅力あふれる地域であったろう。

しかし折角首里王府から八重山頭職に任命された祭金は、勝者の驕りであったろうか、「球陽」は「矜驕自恣暴虐人民」によって、解任されたと記している。その地位を笠に着て人民を痛めつけたために王府に訴えられ、クビになったというのである。「忠導氏正統系図家譜」はさすがに暴虐な振るまいがあつてクビになったとは書いていない。仲宗根豊見親の「二男祭金豊見親使為守護八重山島也勤職四年而亦命三男知良真良豊見親令代之」と記している。つまり祭金が4年勤めたのち、代わって弟の知利真良が後任として赴任したと、あっさりしたものである。

それに引きかえ八重山の記録は当然のこととはいえ、「球陽」よりは手厳しいが、何ともユーモラスな状況でもある。「慶来慶田城由来記」は、宮古の豊見親の命令で百姓の男

女二、三百人が仲良山に動員されて木を伐りだしていた。そこへ宮古の豊見親が死んだそうだとのお知らせが入った。すると百姓たちは一斉に今まで伐りだしていた木を投げ捨てて山を下り、夜通し酒盛りをして歌をうたい、飲んだと記している。余程うれしかったのであろう。それほど痛めつけられていたのであろう。記述にも実感がこもっている。たとえばこうである。豊見親の死を知って山を下るとき、「さらばさらばとやぐい」して、さらに酒宴のくだりでは、「一夜一日あやご歌仕り、神酒焼酎盛んにて遊び」といったぐあいである。時代を現代におきかえても通用しそうな光景である。

仲宗根豊見親の後裔は近世において身分制が確立されたとき「忠導氏」を名乗ったのは先にみたとおりである。但し三男の知利真良の子孫は「宮金氏」（名乗頭：寛）を名乗っている。口碑によれば知利真良は八重山の頭職として彼の地で没したという。八重山の「長栄氏正統系図家譜」は元祖石垣親雲上信保の父について、「宮古島忠導氏之後胤也」と記している。仲宗根豊見親もしばしば八重山へ往来していたということなので、信保の父が豊見親その人であったか、祭金か知利真良か何れとも判じ難い。しかし三人のうち何れであろうとも仲宗根豊見親、つまりは忠導氏ゆかりの人物ということには変わりなからう。

長栄氏の後裔である元早稲田大学総長の故大浜信泉は、沖縄師範在学中など若いころ、長期休暇で帰省するとき、忠導氏本家（外間）を宿舎代りに利用したりしていたという。祖先を一つにするという親近感があつての事であろう。

ところで1500年の、いわゆる「オヤケアカハチらの事件」のころ、共に「太平山」あるいは「先島」とよばれ、元もと一つであるはずの宮古と八重山が、何故に敵対関係になってしまったのか、諸説がある。尚真の琉球王国を確立していく過程での一方は協力（屈服？）であり、他方は抵抗である。南方系文化の最北端に位置する宮古は、北方系文化の最南端にある沖縄本島の情報をいち早く入手する好条件を持っていたということであろう。しかもそれを受け容れる宮古は当時早くも宮古として一つにまとまっていた、いわば宮古としての個性を成熟させていたといえよう。

一方の八重山は地理的に遠く、宮古の三倍する面積に加えて数百メートルの山あり川あり、その上毒蛇ハブは生息して往来はままならず、未だ群雄割拠？の時代。八重山として個性が成熟するには今しばらく時間を必要とする時期であったらう。両者は強大な琉球王権にくみこまれたこと、さらにはその後の歴史的展開も基本的には同じでありながら、現在みるような気質等の違いは、この時期に大きな要因があるのではなからうか。

### 1.1. 豊見親の子孫は「サバ」（鱧）を食せず

仲宗根豊見親の子孫は鯖（サバ、実際は鱧：フカ）を食べないと伝えられている。「雍正旧記」や「宮古島記事仕次」「忠導氏正統系図家譜」「球陽」など、18世紀前葉の文献にみられる記述である。

「家譜」によれば、仲宗根豊見親は弘治年間（1488～1505年）、中山朝貢の帰途、逆風



にあつて八重山へ漂流した。舟はタンタ干瀬というところへ乗りあげ、命を落とすかと思えたとき、フカが現れて危うく難を逃れることができた。「球陽」は時期について「嘉靖壬午」（1522年）と少しずらしてはいるが、内容はさらに具体的である。即ち、難船にさいし乗員はすべて溺死したが、豊見親が海面に浮いていると、たちまちどこからともなく、大鯖が現れて豊見親を背に乗せ浜辺まで運んでくれた。それ以後、豊見親の子孫は今に至るまでサバを食しないというものである。

「宮古山鯖祖氏玄雅献上宝剣」という表題のもとに示されている。宮古の鯖祖氏の玄雅が宝剣を（尚真王に）献上したというものである。先の大戦で失われるまで首里城外にあった国王頌徳碑には「首里おきやかもいかなしの御代にみやこよりち金丸ミこしミ玉のわたり申候時たて申候ひのもん 爰有宝剣神仙託日号治金丸玉称真珠也（中略）嘉靖元年壬午12月吉日」と記されていた。嘉靖元年は1522年であり、この年宮古から宝剣治金丸と真珠が献上された事を明記している。献上した人が誰であるかはふれてないけれども、「球陽」等の記述から仲宗根豊見親であることは明らかであろう。ここで誰しも奇妙に思うであろうことは、仲宗根豊見親について「鯖祖氏」と記していることである。近世琉球で身分制が確立されたとき、いわゆる由緒ある家柄が百姓身分と区別して系図所持を許された。その時仲宗根豊見親の後裔は「忠導氏」を名乗っている。現存する「家譜」はすべてそのように明記している。そのさい童名の「空廣」のほかに諡名の「玄雅」が付けられた。いわば仲宗根豊見親の名乗り「玄雅」は「家譜」整備のころに産まれたものと思われる。「球陽」も「家譜」も玄雅と明記しているのはそれゆえであろう。それでは何故に氏のみが「球陽」で鯖祖氏、「家譜」では忠導氏であろうか。

そこで思い起こされるのは矢張り、「雍正旧記」等に記す「仲宗根豊見親末孫鯖不喰候事」である。「家譜」や旧記類の整備されたのは確かに18世紀初期であろうが、豊見親が鯖に命を助けられたという伝承はもっと早くから伝えられていたものと思われる。おそらく首里王府によって首里・那覇の由緒ある家筋に「家譜」編集について許可のあった17世紀後葉の情報は宮古にも入っていたであろう。当然のことながら豊見親の後裔の人々は、早晚宮古でも「家譜」所持が許可されるであろう事を予期して、累代の辞令書や古記録、伝承等の整理を始め、氏姓や名乗頭字についても検討していたのではなかろうか。そのさい自分たちが今日、豊見親の子孫として門閥を誇っているのは、元祖空廣が「仲宗根豊見親」と世人に尊称された、その威光によるものであることは勿論だが、何よりも豊見親の命を救ってくれた「鯖」のおかげだと考えたのではなかろうか。それゆえ始めは「鯖祖氏」を想定したのかもしれない。

それとも「球陽」を編集した王府役人たちが、宮古から送られてくる「古事」からそのように検討したのであろうか。「記事仕次」を別にすれば「御嶽由来記」も「雍正旧記」もすべて現存する宮古旧記類は王府の求めに応じて収集、整理され報告した文書の控えだからである。「球陽」等の王府編さん史書の宮古関係事項には、多くこれらの報告文が反

映していると思われる。その後、「家譜」整備の最終段階で、「忠導氏」としたのではな  
かろうか。仲宗根豊見親の首里王府との綿密な関係を示す最大事は、何と云っても八重山  
の「オヤケアカハチらの事件」平定をおいてはないからである。王府軍の先導役をつとめ  
勝利に導いた、これこそ首里王府への最大の忠義、忠導氏ということで落ちついたのでは  
なからうか。

ところで「サバを食せず」の要因は、仲宗根豊見親の故事ばかりではない。豊見親の五  
代前の祖である目黒盛豊見親の母方の祖父・炭焼太良、長じて嘉播の親も鱧（鯖）に助け  
られている。三人の親不孝な息子達に沖の干瀬に置き去りにされ、潮満ちきて早や溺死か  
と思われたとき、盲目の嘉播の親を背に乗せて浜まで届けたのも大鱧であった。この恩を  
末代まで忘れず鱧を食べてはいけないと遺言したという、二代にわたる故事である。忠導、  
宮金、根馬の各氏系統の子孫は今もこの遺訓を守っているという。（96号1992.5）

### おわりに

宮古が琉球王権と公的交渉を初めて持ったのは14世紀末といわれている。与那覇勢頭豊  
見親が中山（琉球）王権に直接朝貢したのが、洪武23(1390)年とされているからである。  
以後嘉靖元(1522)年、仲宗根豊見親が宝剣「治金丸」を尚真王に献上（権力委譲？）する  
まで、琉球王権と宮古は対等とはいわぬまでも、従属関係にはなかったのではなからうか。  
もとより限られた史料や伝承等からではあるが、この時期、14～16世紀の宮古は、どの王  
権にも服属することなく「自立」していたであろうと考えている。

現在にもつながる宮古の個性・地域性の素地はそのころに形づくられたことであろう。  
それを立証するのが本シリーズの趣意であったが、その本丸どころか外郭ばかりめぐって  
未だ状況証拠の域にも来ていない。引きつづき追跡するはずであったが、当面の課題に追  
われて11回で中断したままになっている。残る時間はもはや限られているが、主題が主題  
だけに可能な限り再開したいと考えている。